

狭衣物語の流布本と岩波本との比較研究

— 卷一について —

乗 越 良 子

序

狭衣物語は源氏物語に次ぐ作品として、「源氏。狭衣」と古くから併称されている。それほど狭衣物語であるのに研究が進まないのは、異本が他に類を見ないほど多く、本文異同の甚だしいことに原因があるといわれる。異本の数は今日知られているものでも百数十本は越すということがある。

だが、狭衣研究は伝本の研究より始めなければならない。また、各伝本の性質を知るには、各巻別に部分的に詳しい考察をする以外にはない。

狭衣物語が広く読まれるのは、勿論流布本系統である。ところが最近、岩波の古典大系に出版された狭衣物語は第一系統の内閣文庫本を底本としている。流布本とそれとを比較して読んでみると、当然異同がみられた。また、それは驚くほどの異同であつた。これほど甚だしい異同であるなら、両伝本の性格に著しい相違が生じているであろうと思われた。また、その相違によつて伝本成立の問題も含んでいるであろう。そこで両本の異同部分を詳細に比較考察することによつて、性格の相違をさぐつてみようを試みた。つまり、岩

波本と流布本の関係を調べてみた。

本文比較であるから全巻に渡らなければならないが、巻一だけを調べた。それは巻一を読む機会が他の巻よりも多いし、巻一における流布本は巻二以下に比べて諸本との異同が甚しい。そこで巻一について調査すれば、全体の傾向も把握できると思う。岩波本と流布本との異同関係であるが、岩波本は底本の内閣文庫本と同一でないことに注意を必要とする。岩波本は、底本に忠実ではあるが、底本文と同一性格を持つ第一系統の諸本を用いて校訂されているし、校注者三谷栄一博士の研究結果で校合された箇所も一・二ある。そこで、第一系統本と流布本の比較でもある。

流布本は狭衣研究会から発行されている「承応三年版本 さころも」(活版本)を使用した。

一、流布本と岩波本

狭衣物語の分類は中田剛直氏、三谷栄一博士によつてなされているが、三谷博士の方法が定説となつている。三谷氏は伝本を三つの系統に分類された。そして岩波本は前にも記したごとくその第一系統による。ところが流布本は、巻二以下は第三系統であるが巻一の

みは特に甚だしい異同を有することから、第四系統として他の第三系統の伝本と区別された。そこで岩波本と流布本の比較は第一系統と第四系統の比較ともなる。そして同博士は「第一類（この場合「類」は「系統」に同じ）が最も詳細で古本の姿に近いもの」であり「第四類は所謂流布本系で、第三類を基本に、更に他の異本により諸所を校合、改作して、また新たな混合本として成つたもので、刊本として流布したために、広く狭衣物語の基本の書として考えられてきたが、現段階では、何重にも校合し改作された一混態本に過ぎない」とされた。

この第一系統を原型に近いとする三谷博士の説に對立するのが、落合璋子氏の説である。氏は卷二を中心に研究されたため、流布本は第三系統となるが、三系統の本文異同關係を比較考察された結果「現存狭衣物語伝本の三系統のうち、最も古形であると考えられるのは、第三系すなわち流布本であり、第二系はその改作本であつて今まで古形であると考えられていた第一系は、第三系に、第二系及び第二系の成立過程を持つ一本の異文を取り入れて成立した混合本である」と反論された。本田義彦先生も蓮空本と流布本との關係を研究された結果「蓮空本の方が原型に返いと考えられる部分がないことはないけれど、概して蓮空本の方に注釈的解釈的な文の混入、又は後世的な梗概化的痕跡、或いは誤解に基づく改作の跡などが見うけられるようである」と述べておられる。蓮空本は第三系統であるから、流布本を原型に近いとする落合氏の説と異ならない。このように對立説のある岩波本と流布本である。

注一 狭衣物語 日本古典文学大系

注二 狭衣物語の本文とその展開 落合璋子 国語国文 第三二卷第一号

注三 さごろも会研究報告 本田義彦 平安文学研究 第三十五輯

二、文中の古歌の句部分における異同（省略）
三、岩波本が有する個所

異同甚だしい個所の兩本の比較は困難を有するので、比較の容易な一方のみが有する個所について先ず岩波本の場合を考える。

〔一〕 突然の文

比較すると前後に全く異同がない個所に、岩波本が突然の語や文を有する場合がある。こゝではその中から比較的長い場合を例として示し、考察を加えてみた。（紙面の都合により、左側に流布本、右側に岩波本の本文を並べて示した。傍線部分は流布本と同じく岩波本にもみえることをあらわし×××はどちらか一方には欠けることを示す。また岩波本にあることを示す。以下の用例も同様である。）

(1) むつましようこそおふしたて給ふまじきわざなりけれ×××××
の侍従宰相中将などの例どももなくやはましてこれはことほり×××××
ぞかしいはけなくより人にも似ずめでたき御有様をやうやう物×××××
の心知り給まゝにかゝらん人をこそわが物にせめこれに劣りた×××××
らん人をば見じとのみ思ししみにければとかく人を見集め給ふ×××××
まゝにいとかくしもし置きけん結ぶ神さへ恨めしぞ思さる×××××
×××××

このころ堀川のおとゝ

(ロ)そのわらはにとひてをくれとの給へば××××××××××××××××
 家はたゞこの大宮に候ひけり暗くなるまゝにいみじうこそ泣き
 ×××
 給へいかが任ふまつらんずるぬ(ハ)わらはのまかりつらむかたも知ら
 ず

(岩波本 2066頁)

(イ)かゝればえせ宮仕人は忍びかたらひ人はまうくるぞかし××××
 此の
 はする人にかく聞えさせ給へかしわざとならぬ宮仕へ人たちに
 ×××
 だにこそかやうの君だちは車は貸し給へさばかりの事はなごて
 ×××
 か聞き給はぬことはあらん
 ×××
 ×××
 みにこそ (岩波本 3697頁)

(イ)は幼少の頃から兄妹のようにして育つた源氏宮に狭衣が恋を抱
 かれ、それに苦しむ書き出しの所である。前文は特別異同がない。
 とところが流布本は(イ)の後より「この頃堀川のおとど」と、堀河院一
 家の紹介に話の筋が変わるが、岩波本は「早うは仲澄」以下の長文
 が例のようにある。だが「仲澄」については春宮が狭衣に「仲澄の
 侍従の真似するなめり」と語られるのが両本とも見えるし、「いは
 けなくより……恨めしくぞ思さる、」については、岩波本は後に次
 の具体的な表現をしている。

我も幼ふおはせし時は片方にかくのみ幼ふき者はめでたきものと

のみ思し習ひたるをやう／＼物の心知り習ひ給まゝに此御様な
 らん人を見ばやさらんこそ生ける甲斐なかるべけれと思ししみに
 ければ……(中略)……人知れぬ物思ひは(やる)かたなく
 まさり給て吉野の滝とや遂にとのみ立居に仰せらるゝこそわり
 なかりけれ (岩波本 36頁)

これが(イ)の部分と似ている事はいうまでもない。「宰相中将」に
 ついても「源氏の女一宮もいとかくばかりはえこそおはせざりけれ
 ばにや、薰大将のさしも心留めざりけん」(岩波本55頁)の文を岩
 波本の方は持つ。このように(イ)で岩波本が有する箇所を考えると、
 それについての文が後にまたみられる。これが物語の伏線としても
 全体からみるとその重要性は乏しい。単なる書き添えかとも考えら
 れるのである。

(ロ)は僧に拘引されて行く女(飛鳥井姫)を狭衣が救つた個所であ
 る。隨身の語に「大宮に候ひけり」と岩波本にはあるが、これはそ
 の場面から考えておかしい言葉である。というのはすぐ後で狭衣が
 女に「おはし所教へ給へ」と問うのに対して、女の態度は「ほのぼ
 の覚ゆるまゝに聞えんと思へどたゞわなゝかれてとみに物も言ひ出
 られずたゞ泣きにのみ泣きまざる」のであり「言ひ出でむ所の様の
 恥しさまたはか／＼しうも覚えぬに泣声はましていとわりなけれど
 堀河といづくとかや」と、やつとの思いで所を言うのである。よつ
 て当然隨身に答えたとも考えられないし、狭衣に聞かれたから右の
 ごとき態度をしたとも思えない。いずれにしても「大宮いづく云々
 」は適当でなく、後文を知つてからの挿入文ではないかと思われ
 る。

(ハ)は飛鳥井姫が欺かれて筑紫行ききの船に乗せられる以前、「土忌

この個所によつて岩波本に仏教用語が多く狭衣の言動を支配していることがわかる。こゝも岩波本が長文だからといつて、流布本を梗概本とはいえない。岩波本は「仏となるべき菩薩の住む内院へ行きたい」という弥勒信仰を経文の引用で強調し、郭公の登場で「天の迎へ」を望むことを反復させている。吉原氏は「狭衣物語の仏教の特色としての弥勒信仰は逸せられない特色であると思はれる」とされた。その意味では岩波本が勝れているだろう。しかし、同氏は

両方を一緒にして両方を含む狭衣物語を根底にその特色を示されていると思われれるから、「狭衣云々」は各系統別の考察によつて多少の相違が生じると思う。源氏物語を模倣し、それを越えようとした狭衣物語であるから、その主題は源氏物語の物のおはれを取り入れ光源氏に似た狭衣の恋愛を中心とした浪漫性にあると一般にいわれることからすると、流布本が勝れているのはなかるうか。例に示した個所の前文は、「寝ぬに明けぬと言ひ置きけん人も羨ましきに」で書き出されている。それが岩波本では「ありし業」から狭衣の弥勒信仰へと話に変化する。その変化には何の必然性も見られぬ。「寝ぬに明けぬ」と恋の悩みで書き出されたなら、それについての内容に展開すべきである。「ありし業」の前文「ほのぼの云々」は明らかに枕草子を引用している。ところで流布本は「花橘云々」が

「ほのぼの云々」に続く。この部分について土岐武治氏が「は明らかに枕草子を引用している。ところで流布本は『花橘云々』が^{注三}、枕草子三十九段『鳥は』の『花橘などにやどりして、はたかくれたるも』を受けて改め直したものと考へるなら、前文と同じく枕草子の引用であり、流布本の接続・展開が自然であるといえよう。また、強いて三十九段の引用と考へなくとも、本文は『春の明ほのならねど……』とあるから、三十五段に見えるように、春な

らぬ↓夏↓橘川ほとゝぎすのよすが↑ほとゝぎす↑花橘に宿かる……の変化や連想は当時としては常識的な事であつたであらう。よつて流布本の方が自然な文の展開であると思はれる。

流布本にある「ねにあらはれにけり」は、秘めねばならぬ狭衣自身の恋の苦しみを、ほとゝぎすが鳴き渡つた事によつて更に深く自覚したにほかならない。狭衣の源氏宮への恋は、ねに表わすことのできない不倫の恋であるためである。「夜もすがらなげきあかして時鳥」の和歌は時鳥ではなく、「寝ぬに明けぬ」の狭衣自身であり「鳴く音」とは恋の苦しみに泣く狭衣の声ではないのか。恋については人に語れないが、泣き声くらいは聞いてもらいたい。それが「なく音をだにも聞く人もなし」と口ずさまれたのであらう。

このように、弥勒信仰が狭衣の行動を強く支配している岩波本と恋愛を中心とした流布本との特色の相違がこの例にはつきりみられるのである。

注一) 狭衣物語の仏教思想 吉原シゲコ 平安文学研究 第三十六輯

注三) 狭衣物語に及ぼせる 土岐 武治 平安文学研究 第三十四輯
枕草子の影響

結論

岩波本と流布本の本文異同を、一つ／＼考察すると、岩波本は後人による書き添え個所と思われる場合が多い。そのため表現が詳細になつてゐるが辻褄の合わない個所もある。流布本にあり岩波本に欠ける個所は、岩波本の脱落と考へられる。また、流布本は心理描写を省略しているからとして、鎌倉時代にその成立時期を下げられていたが、流布本のみが有する個所に心理描写が見られるから、成立時期を下げることはできないと思はれる。

えよう。また、強いて三十九段の引用と考えなくとも、本文は「春の明ほのならねど……」とあるから、三十五段に見えるように、春な

ていたが、流布本のみが有する箇所心理描写が見られるから、立時期を下げることはできないと思われる。

岩波本は表現が詳細なため注釈的性格をもつが、流布本に省略の性格があり、梗概本となつていゝとは考えられない。表現においても流布本がすぐれていると思ふ個所がある。以上の事から流布本がもと本に近いと思われる。第四系統である流布本がもと本に近く、第一系統である岩波本は、流布本より後のものであり、後人による書き添えなどが行われた結果によつて生じたものと思われる。

菅原道真の詩と性格

——白楽天との比較より——

はじめに

道真ほど、この日本の歴史を通じて、人々に広く親しまれ敬せられて来た人は少い。にもかかわらず、今日まで彼の詩は、或る特定の二、三篇を除いては殆んど知られていない。また性格についても

椛 島 靖 子

同様、理想化された、偶像としての道真があるのみである。文学史上に於いては、平安朝国風文化の先駆けをなした彼であるが、伝説的天神崇拜の域を出て、人間道真とその文学を直視する科学的見地に立つた研究が、いまだに殆んどなされていないということは、誠